

## プレストレスト鋼板・コンクリート合成版のクリープ挙動

九州大学 学生員 ○新西成男 大城壯司  
 九州大学 正員 太田俊昭 日野伸一  
 九州大学 手島義純

### 1.はじめに

応力を持続的に受けるコンクリートは、乾燥収縮のほかに時間に依存するクリープ現象をも起こすことが知られている。著者らは、コンクリートと鋼板を一体化した合成版を対象として、底部鋼板に2方向緊張力を加えて、コンクリートにプレストレスを与える新しいプレストレス化工法を開発中であるが、その場合、初期導入応力が比較的低レベル( $3000\text{kgf/cm}^2$ )であるので、乾燥収縮およびクリープひずみが及ぼす導入プレストレスの時間的な減少が設計上重要な問題となる。本研究は、この問題について、実験的な基礎研究を行ったものである。

### 2. 実験概要

本実験のために製作した合成版供試体の諸元を図-1に示す。供試体は、鋼板(SM490、 $2700 \times 1900 \times 6\text{mm}$ )、主軸方向鉄筋(SD345、D25)、軸直角方向鉄筋(SD295、D13)、スタッド( $\phi 13, h=80\text{mm}$ )、端部アンカーブレートで構成されている。また、軸方向のみにプレストレスを与える一方向タイプの供試体も同様な諸元で製作した。使用したコンクリートの配合を表-1に示す。鋼材のひずみは、ゲージを表面に貼付し、コンクリートのひずみは、コンクリート中央下縁に埋め込みゲージを設置して測定を行った。実験の手順は次のとおりである。

①鋼板・鉄筋緊張装置<sup>1)</sup>を用いて、鋼板と鉄筋を所要の初期引張応力度まで緊張する。

②コンクリートを打設し、材令7日までその

状態で養生する。

③鋼板、鉄筋に作用している緊張力を解放し、コンクリートにプレストレスを導入する。

④供試体を温度 $20 \pm 2^\circ\text{C}$ 、湿度 $60 \pm 10\%$ の恒温恒湿室においてクリープの測定を行う。  
という過程を経る。

①におけるプレストレス導入前の鋼板・鉄筋の(弾性)ひずみおよび応力度を表-2に示す。また、③の段階で得られるプレストレス導入直後の鋼板・鉄筋の(弾性)ひずみおよび応力度を表-3に示す。同表における( )内のひずみは、鋼板および鉄筋の初期緊張力を合成断面へのプレストレス力とした弾性計算により算出される弾性ひずみを初期引張ひずみから差し引いたもので、応力度は上記のひずみを平面応力状態の応力度に変換したものである。表-4にはコンクリートの(弾性)ひずみおよび応力度を示す。同表における計算値も上記の弾性計算により算出したひずみおよび応力度である。

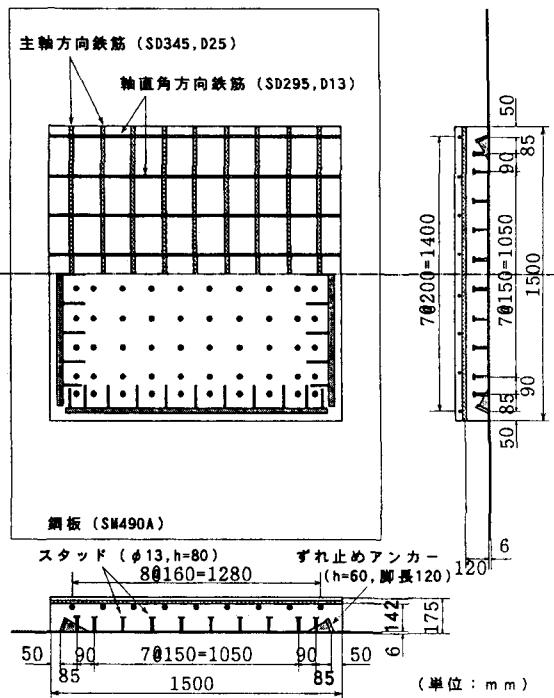


図-1 合成版供試体断面諸元

### 3. 結果および考察

各供試体について、コンクリート中央下縁のプレストレス導入以後のひずみ経時変化を図-2に示す。図中に示す解析値は、初期圧縮応力度の値として実験値を用い、Trost<sup>2)</sup>のクリープ式により推定した値である。1、2方向両供試体ともに、軸方向では高い変化率、軸直角方向では低い変化率でのひずみの進行が見られる。解析値と実験値とを比較すれば、2方向プレストレスの軸方向の初期材令時のクリープひずみに定量的な差が認められるが、大旨、解析値は、実験値をよく追跡していると云えよう。プレストレス導入以後の鋼板および鉄筋の実測ひずみより、コンクリート断面に導入された（鋼板および鉄筋とコンクリートは完全接合と仮定）として計算したコンクリート中央下縁の応力度を図-3に示す。図中に示す解析値は上記のTrostの式による推定値であり、初期材令においては実験値を比較的良く追跡していると云える。

表-1 コンクリートの配合

W/C (%)	s/a (%)	単位量(kg/m <sup>3</sup> )				収縮 低減材 (kg)
		水 W	セメント C	細骨材 s	粗骨材 G	
37	37.2	171	463	614	1088	1.158 *10.0

\* コンクリート 1 m<sup>3</sup>に対して

表-2 プレストレス導入前の鋼板・鉄筋の  
(弹性) ひずみおよび応力度

△	供試体 の種類	鋼板		鉄筋		△
		軸 方 向	軸直角 方 向	軸 方 向	軸直角 方 向	
ひずみ (×10 <sup>-6</sup> )	1 方向	1180	-443	1305		△
	2 方向	1024	-73	1389	1453	
応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	1 方向	2519	-280	2654		△
	2 方向	2390	496	2825	3150	

表-3 プレストレス導入直後の鋼板・鉄筋の  
(弹性) ひずみおよび応力度

△	供試体 の種類	鋼板		鉄筋		△
		軸 方 向	軸直角 方 向	軸 方 向	軸直角 方 向	
ひずみ (×10 <sup>-6</sup> )	1 方向	677 (666)	-261 (-322)	1154 (1177)		△
	2 方向	540 (482)	-42 (-176)	1298 (1250)	1410 (1424)	
応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	1 方向	1431 (1365)	-177 (-328)	2347 (2552)		△
	2 方向	1250 (1025)	252 (-103)	2498 (2710)	3057 (3087)	

表-4 プレストレス導入直後のコンクリートの  
(弹性) ひずみおよび応力度

△	供試体 の種類	計測値		計算値		△
		軸 方 向	軸直角 方 向	軸 方 向	軸直角 方 向	
ひずみ (×10 <sup>-6</sup> )	1 方向	-650	161	-505	119	△
	2 方向	-666	16	-529	-100	
応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	1 方向	-241	3	-188	0	△
	2 方向	-244	-46	-204	-78	

#### 参考文献

- 太田他：鋼板・コンクリート合成版の2方向プレストレス化に関する基礎的研究、第47回年次学術講演概要集、1992.9
- Trost, H.: Zur Berechnung von Stahlverbundtragern im Gebrauchszustand auf Grund neuerer Erkenntnisse des viskoelastischen Verhaltens des Betons. Der Stahlbau 37, H. 11, 1968.

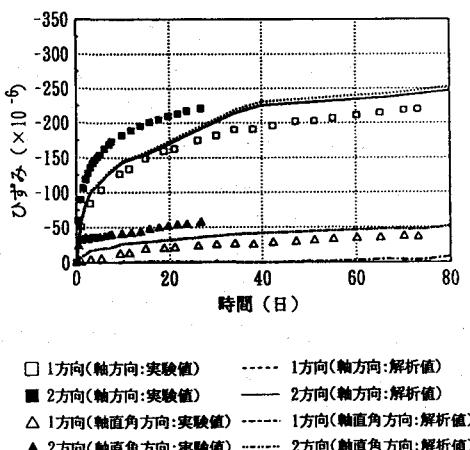


図-2 ひずみ経時変化（コンクリート中央下縁）

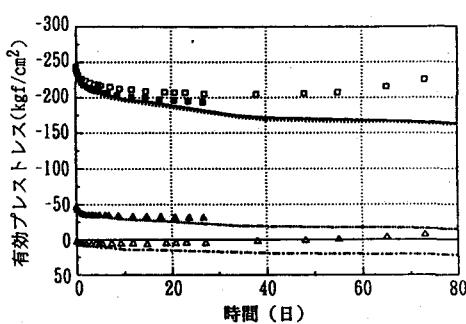


図-3 有効プレストレスの経時変化